言語習得からみた母子相互作用

畠　山　富　而（財総合花巻病院）

1.　研究協力者．主としてフイルド調査のため，町村保健婦の協力を得て行う。

2.　研究目的

言語習得と母子相互作用との関連を主として主養育者との対応の状況，遊びの内容から調査する。

3.　研究方法

1）縦断的研究：岩手県石鳥谷町（都市近郊地区）の第１子の乳児を40名（予定）を対象に生後１カ月齢より18カ月齢まで縦断的に言語発達状態を追求する。

その方法と内容は，生後１カ月齢より，予め用意しておいた調査用紙を用い，１カ月間毎に筆者が直接，児の健康診査と調査内容を記入する。調査内容の主なるものは，家の職業，共稼ぎの有無，主養育者，乳児期栄養法，哺乳の状況と時間・哺乳後の呼びかけ，遊びの時間（応待者），離乳状況と離乳食，オモチャの種類と月齢，主養育者以外の兄弟姉妹，その他の関係者（祖父母）などが含まれている。そして各々の１カ月間の中間日には，さらに主養育者（母親）により，時に保健婦の協力を得て同様の調査項目を記入してもらう。その上，２カ月毎に健康診査の場において主養育者と児の自然のままの授乳状況，遊び状況を写真に撮り主養育者との関係の判断に用いる。

2）横断的研究：石鳥谷町と同県，山間の町安代町の第１子，18カ月児，100名（予定）を対象に，その時点における言語習得状況を調査用紙に基き，とくに主養育者との接触時間および遊びの内容，オモチャの種類などとの関係から検討する。

1）2）の研究期間は，研究開始より２年６カ月とし，その後，調査内容を纏める。なお，この研究には，田口恒夫，笹沼澄子共著「ことばのテストえほん」－言語障害児の選別検査法を参考とする。言彙の記入は，擬態言語，有意単語とするが，消略語も意味のとれるものは有効と判定する。反響言語は除外する。また語彙に極端な片寄りのあるもの（例えば自動車名のみの場合など）は対象から外したい。

なお，この調査対象児については，出生時低体重児，身体発育値97パーセンタイル，３パーセンタイル以下，頭囲2.5 SD 以下，その他特別の疾患を有するものは除外して調査する。

昭和58年度調査経過

1）縦断的研究：昭和59年２月現在，協力をいただいている対象母児は18名であり，最年長児は生後８カ月に達している。主として母児のアタッチメントの時間と哺乳状況，その対応，遊び時間とオモチャの種類などに重点が置かれて調査が進められている。月１回の健康診査とその時点の調査記入，および月１回の母親自身の用紙記入も順調に進展している。この対象母児の各家庭は祖母(姑)の協力も良好であり恵まれた対象と言える。

2）横断的研究：現在まで両町において40余名について18カ月時点における言語習得状況調査を完了しており，一部，調査内容の集計検討を行っている。なお，対象児は健康診査も平行して行っており住民の協力は良好である。